

# 村上春樹「緑色の獣」論

ナラティヴ

## —〈心の闇〉と闘う「私」の物語—

—青年期教育において文学教材が果たす役割について考える③—

荒木奈美

はじめに

学校教育での現場経験を振り返り、何気ない会話から改まった教育相談の場面まで、子どもたちの様子をことあるごとに思い返している。その時には適切な応対ができず、彼らが抱える心の問題をうまく救い出せなかった生徒が数多くいる。教師に心の刃をむき出しにして無言を決め込む生徒がいた。彼らはかつてのように教師に直接向かってくることはない。「何が不満なの？」—「別に」「おまえに関係ない」の繰り返し。取りつく島がなかった。友人との些細な心の擦れ違いから学校に来られなくなった生徒や、「何をしても充実感が得られない」とリストカットを繰り返し返していた生徒を結果的に見殺しにしてしまった。「友だちは他にもいるんだからとりあえず学校に来ようよ」「学校に来れば何かしら楽しいことも見つかるから。夜は早く寝るんだよ」—「はい、わかりました」などというやりとりもむなし、彼らは不登校を繰り返し返した。毎日楽しそうに

\*1  
筆者は二〇一一年三月まで公立の高等学校に国語教員として勤務していた。十二年間で三校を歴任し、担任として卒業生を送り出した経験が二回ある。

教室で出会う生徒たちにも問題は山積していた。「お腹が痛い」と保健室に頻繁に通う生徒。仮病ではなく本当に身体症状が出るらしい。「大丈夫?」「生活が不規則なのじゃない?」「ちゃんとご飯食べてるの?」―「毎日食べてますし、夜も寝ています」養護教諭の先生に後から伺うと、彼女の家庭環境には複雑な問題があったという。しかし私は忙しさにかまけてゆっくり話を聞いてあげることもできなかった。

数え上げればきりが無い。今思うと一見穏やかな教室の中をふと視点を變えて見渡せば、誰もが人知れず見えない涙を流していたように思える。その中に「担任」として教壇に立ち、「きみの将来の夢は?」などと明るく聞いて回っていた筆者自身の過去を振り返ると、「自分は何も見えていなかったのだ」とつくづく思う。

教師から見て問題のない、いわゆる「よい子」の中にも、表には見えない〈心の闇〉が見え隠れしていた。彼らは痛々しいほどに「模範的な生徒」を演じようとしていた。教師に迷惑をかけることはなく、むしろ教師の顔色をいち早く察し、先回りして「模範解答」をさらりと saying のける。人間が人間である限り、そもそもさまざまな意味において「完璧な人間」などというものは存在しないだろう。そのような中であまりに「完璧な」彼らの姿を目の当たりにすると、「本当なの?その気持ち」という疑念が浮かぶこともしばしばであった。

もしかしたら「仮面」かもしれないそのような「よい子」の「仮面」を剥がす。そこまで行かずとも「それって仮面かもしれないよ」と彼ら自身に気づかせる。それさえできれば、彼らに自己を相対化する視点を与え、生き方を「揺さぶる」ことは可能かもしれない。しかし実際はそれこそが難しいのだ。

自分に求められている「キャラ」を演じ続け、「本当の自分」を出せないことに疲れ切った子どもたちがカウンセリングに訪れるケースが増えているという<sup>\*2</sup>。教室の中で自分に与えられた「役割」を察して演じることが、自分の「本当の気持ち」を伝えることよりも優先してしまう子どもたちがいる。その場の人間関係を壊さないための気遣いによって、人知れず孤独感を抱えてしまう。一度はまってしまった「キャラ」の仮面を剥がすのは、そう簡単なことではないだろう。

とはいえ、一方でもう一つの疑問が残る。そもそも彼らの「本当の自分」とはどこにあるものなのか。岩宮恵子が指摘するように、最近では、周囲が「悩んだり困ったり」で勧められてカウンセリングを受ける子どもたちの中に、本人は「悩んでも困ってもない」ように見えるケースが少なくないという<sup>\*3</sup>。かつてであればそのような子は、何度もう話をするうちに「実はこういうことで悩んでて」「ホント困ってるんです」などという打ち明け話になっていったのが、最近はそのはいかないらしい。掘り下げても掘り下げても、彼らの内面には行きつかないのだ。

自己同一性の確立を先送りにした現代青年期にある若者たちは、目の前に与えられた「役割自己」を仮面にして、「本当の私」は別のところにあると懸命に自分を守ろうとする。しかしその「本当の私」はどこまでいっても見えてこない。「役割自己」を演じ続けたその先にある「本当の自分」などというものは、そもそも彼らに存在するのだろうか。

村上春樹「緑色の獣」は、短編集『レキシントンの幽霊』（文藝春秋一九九六）に収

\*2

「キャラ、演じ疲れた『本当の自分』じゃない」、朝日新聞、二〇一〇年十一月二〇日朝刊

\*3

岩宮恵子「フツの子の思春期」、岩波書店、二〇〇九、xi頁

められたとても短い作品である。「私自身の体の中から聞こえてくるような」音とともに「私」のもとにあらわれた「緑色の獣」。獣は「私」にプロポーズするためにやって来た。獣は唐突に「私」に求愛するが、「私」は「人の心が読める」らしいこの生き物を忌避し、結果的に罅り殺してしまう。

「私」は、小さい頃から何かあると窓辺にじっと座って一本の木を眺め続けてきたという女性である。彼女には夫がいるが、夫は毎日仕事で帰りも遅く、ほとんど家にいならしい。よけいな外出もせず、一通りの家事はこなした上でひたすら夫の留守を守っていることが伺える点から見ると、この「私」は、ひたすら夫に従順で献身的な女性であるようにも読める。ところが一方で彼女は、自分の目の前に突然立ち現れた「獣」と対峙し、恐ろしいまでに暴力的な感情とともに闘い、しまいはそれを抹殺してしまう。彼女はいったいどんな女性なのか。心にどのような思いを抱え、毎日窓辺に坐って庭木を眺め続けてきたのか。本稿はそのような観点から、ごく普通に見える一人の女性の〈心の闇〉の内実を明らかにすることを目指す。そしてその上で、青年期にある子どもたちが文学教材を媒介として彼ら自身の自己同一性の問題を考えていくという筆者自身の研究主題との関連から、その教材価値についての考察も試みたい。

## 一 「私」の置かれた状況に関する考察

### (一) 自分の生まれ育った家に夫と住む「私」

まず「私」が現在置かれている状況について、語られている内容にもとづいて整理す

\* 4  
初出は『文學界』一九九一年四月臨時増刊号。本文の引用は『村上春樹全作品一九九〇～二〇〇〇 ③』講談社、二〇〇三

る。近所に「家が一軒もない」という地域に住む「私」。夫は毎日仕事で忙しく、昼夜にわたり不在がちであるらしい。この日も夫は「いつものように仕事に」出かけ、「仕事に出た夫は真夜中まで戻ってこない」という一日であった。家の庭には「子供の頃」に「私」が植えたという「椎の木」があることから、現在の住まいは「私」が小さい頃から住んでいる家ということになる。なぜ「私」が夫と自分の生家に住んでいるかについてはわからない。「私」が父母と同居しているかどうかについても物語の枠内では一切明かされていないため推測の域を出ないが、獣が「私」のもとを訪れた時、とっさに「近所には家は一軒もないし、仕事に出た夫は真夜中まで戻ってこない」と考えた上で、他には誰にも助けを求めていることから考えれば、この家には現在、夫の他に住人はいないものと考えられる。つまり「私」はこの家にいる限り、夫以外の誰ともほとんど接することのない毎日を送っていることが伺える。

(二) 夫にも自分の「役割」にも、「とり残されている」感じを抱いている

「私」が夫とおそらく二人きりでこの家に住んでいる理由や、かつてこの家に住んでいたであろう父母をはじめとする「私」の家庭環境など、何かと謎の多い物語設定となっているが、ここで一つ着目しておきたいのは、夫との関係について語る「私」の、その表現の仕方である。夫を仕事に送り出すことを「後に残された」と語り、毎日の「やるべき仕事をし終えた時には、「私にはもうやることがなかった」と言い表している。

この表現から「私」は、あくまでも夫や自分に与えられた義務を起点として、自分の行動をはかっていることがわかる。自分は仕事に出かけた夫に「置いて行かれてしまっ

た」存在であり、自分がすべき仕事に対しては、「すべてやり終えた達成感」よりも、「与えられた仕事がもうない」という取り返しのつかない感じが残ってしまっている。自分自身を起点とすれば、「夫を送り出した私は、すべてのやるべき仕事を片づけて」などと表現できる内容である。夫からもやるべき仕事からも「とり残されている」というこの〈満たされない感じ〉は、あたかもお母さんに置いてけぼりにされた、小さな子どものものである。しかも「私」がこの後に「椎の木」を眺めているのも、「他に何もすることがない」ので「何をすればよいかふと思いつくかもしれない」からという理由である。自分の意志で選択したはずの「木を眺める」という行為も、それは決して自分の本意ではなく、「何もすることがない」からしかたなく選んだものであるという。そしてそれを見ているうちに「何をすればよいか」を「思いつくかもしれない」からという。そもそも「私」には、「あれをしたい」「これをしたい」と自然に湧いて出てくる自我欲求のようなものがないのだろうか。

### (三) 夫に依存する「私」の姿を通して見えてくるもの

「私」の父母との関係についてもあらかじめ言及しておきたい。もちろん物語設定上、書かれていないことは推測の域を出ない「憶測」に他ならないが、父母が不在の理由は複数考えられるところである。すでに二人とも死んでしまったのかもしれない。いやどちらかは残っているが、事情があって今は離れて暮らしているかもしれない。もちろん二人とも健在であるが、何らかの理由で今は別の家に住んでいるということも考えられるだろう。離れて暮らしているのはほんの一時で、基本的には「私」の育った家族と夫

と暮らしているという可能性もないわけではない。

いずれにせよこの「私」の育った家庭環境については何も語られていない以上、あらゆる内容が想像の域を出ないものであるが、「私」が自分の意志を強く持たず、夫にひたすら依存して待ち暮らすその心性の根本には、自分が育った環境における要因が色濃く反映しているのではないかというのが、本稿の依って立つ立場である。夫を送り出し、「やる」べき仕事を終えてしまうと「何もすることがない」と考える「私」。自分を起点にして「夫を送り出す」という発想ではなく「後に残された」と、あくまでも夫の立場から自分自身をとらえている「私」。そしてこの「私」の「満たされない感じ」はどう説明すればよいだろう。「私」には、友人なり親戚なり、夫の他に関係を結んでいる他者がいるのだろうか。

もし夫しかないというのであれば、これは「依存」という病、自己同一性が確立していないままに他者に自分の身をゆだねてしまう「関係性依存」に通じる問題ではないかと考えてみる。それは数多くの「依存症」と同様に、依存対象から引き剥がされても自分自身の自己が未発達な故に再び対象に依存せざるを得ず、気づけば依存のループに嵌まり込んでいく、底なし沼のような病理である。

もちろん「私」がこの恐ろしい関係性の病理に巻き込まれていると断定するのは早計であるが、「私」が「自分の心を読まれる」ことを極端に恐れる姿をたどっていくと、ここにもまた同様の病理が垣間見えてくる。

## 二 「私」が抱える〈心の闇〉——臨床心理学的考察を通して

### (一) 自分の心を読まれたくない「私」

この物語の中心になっているのは、「私」と「緑色の獣」との静かな闘いである。この獣は、「私」が小さい頃からよく話しかけていたという、自分が植えた一本の「椎の木」の根元の辺りから突然姿を現している。最初は「まるで私自身の体の中から聞こえてくるよう」な音とともにその存在を感じた「私」。そしてその音が「少しずつしかし確実に私の方に近づいて」来て、「私」はその後窓に映る木の根元に、視界を通してはっきりその存在を認める。「きらきらと光る緑色の鱗に覆われて」、「奇妙に長く」「先にいけばいくほど緑色が濃くな」る「先端は鞭のように細く尖った」「鼻」を持つ獣も、目だけは人間と同じ形をしていた。しかし「私」はその目を見て思わず「ぞっと」する。その理由は「人間のように」「きちんとした感情のようなものが宿って」いるような「目」であったからである。

獣が「ゆっくり」玄関に近づきドアをノックすると、「私」は「悲鳴をあげることすらできない」い恐怖ととともしっと息をひそめ、様子を伺う。しかし獣はおかまいなしに「鼻の先」でカギをこじ開けてしまう。この時「私」は、獣が慎重に鼻の先で部屋の様子を伺うのをごく冷静に眺めながら「あの鼻先をすっぱりと切り落としてやればよかったの」と思う。そして自分の家にある「よく切れるナイフ」を思い浮かべる。すると獣は「あなた、そんなことしても駄目ですよ」と声に出して言う。この時「私」は



言葉を発していない。ナイフで獣の鼻先を切り落とすことをあくまでも頭に思い浮かべただけである。ところが獣は「そんなこと」という表現で、「私」が頭に浮かべた内容についての返答をしている。「私」の心は獣に読まれていたらしい。すると「私」は「こいつは人の心が読めるのかしら、もしそうだとしたらやっかいな事になったわ」と思う。「私」は「誰かに勝手に自分の心を読まれたりするのはい慢できない」のだ。

相手に「人間のように」「きちんとした感情のようなものが宿って」いる「目」を見て「ぞっと」し一度は怯えるが、その一方では極めて冷静に獣を観察したうえで「鼻先をすっぱりと切り落としてやればよかった」などという残酷なことを思う「私」がいる。そしてひとたび「自分の心」が「読まれ」ているかもしれないと思い「やっかいな事になった」と考えるとすぐに「私」は、「体中にじっとりと冷たい汗をか」きながらも、獣の様子を極めて冷静に伺い、戦闘態勢に入る。獣の目的は「私」に「プロポーズ」することであった。獣は「ずっと深い深いところ」で「私」を想っていたが、ついに「我慢がきかなくなつて」やって来たのだという。しかし「私」は思ったことがすべてこの獣に通じてしまうことを確信した上で、「思いつく限り残酷な場面を頭に思い浮かべ」ることで、獣への攻撃を開始する。獣は「辛そうに悶え」「のったりとした悲鳴をあげ」「のたうち、苦し」む。自分には「何も悪気はな」く「ただあなたのことを想っておつただけ」なのになどと恨みがましそうに慈悲を乞うが、「私」は容赦しない。「もっとひどいことを考えてや」ることで、さらに激しい攻撃を加えていく。そしてついに獣は、だんだんと「輪郭がぼんやりと滲んできて」、鼻が「みみずのようにするすると縮」み、そして最後に残った「悲しそうな膨れた目」もついに消えてなくなり、存在そのものが

消滅してしまふ。

表向きは自分の意志を持たず、ひたすら夫に依存し生きているかのように見える「私」が、人間の目をした獣に自分の心を読まれたと感じた途端、残酷な行為に及ぶ。それは直接言葉を浴びせたり、ナイフで突き刺しその手で血をたぎらせるというのではなく、あくまでも観念的な行為であるが、それによって獣はその存在を消されてしまうのである。「殺戮」に匹敵する行為であることには変わりない。それにしても「私」はなぜ、ここまで激しい攻撃を獣に浴びせたのだろうか。

## (二)「共依存」という病理からみた「私」

西尾和美は「自分のことより他人の問題の世話に夢中になり」「何らかの機能不全を起している家庭」で育った「機能的な人間関係」を持ってない人間のタイプのをもって「共依存」傾向にある人物とする。<sup>5</sup>「共依存」とは、もともとはアルコール依存症の患者の妻を対象として名づけられた関係性依存の一つのタイプの名前であるが、次第に何らかの「機能不全」を抱える家族に起こる同様の症状全般を指すものとして、広く定義されるようになった。一九八〇年代に広まったこの「共依存 co-dependency」という概念は、C. L. Whitfield が紹介しているように、<sup>6</sup>実に多様な解釈がなされてきた経緯がある。アンソニー・ギデンズは「共依存」にある人を「自分が求めているものを明確にしてくれる相手を一人ないし複数必要としている人間」と定義し、「相手の欲求に一身を捧げていなければみずからに自信をもつことのできない」性質を指摘している。<sup>7</sup>そしてこの「共依存」にある人の中で関係性そのものが「嗜癖 addiction」の対象となっている

\* 5

西尾和美「共依存症の精神療法」  
『こころの科学』五九、一九九五  
三九頁

\* 6

Charles L. Whitfield *Co-dependence: Healing The Human Condition* Hearth Communications, Inc., 1991, p.8

\* 7

Anthony Giddens, *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love, Eroticism in Modern Societies*, Polity Press, 1992, p.89  
(アンソニー・ギデンズ『親密性の変容』而立書房、一九九五(一三五頁))

間柄を「《固着した》関係性」と称した上で、この関係性が「日々の型にはまった義務的な行いの原因」により「病的執着」となっていく可能性を指摘している。

この「共依存」をキーワードにして、物語られた「私」の様子を改めて振り返ってみると彼女の抱える病理が浮かび上がってくる。「夫」に必要以上に依存するのは、何より自分に自信を持ってないからであり、そのベースには自分自身の自尊心の低さを他人によって補おうとする意識が無意識に働いている。そして彼女自身がその問題に気づかぬまま、《満たされない感じ》を抱きながら夫を送り出すことが日常の「義務的な行い」になっているため、すでにそれは「病的執着」と化している可能性もあるだろう。「<sup>9</sup>」が指摘するように「共依存」にある人は「他人を愛する基礎になっている自己愛が十分に発達していない」という見方もある。となればその背後に見え隠れする、物語の上では明らかにされていない、彼女の成育上の問題に触れる必要も出てくるだろう。

斎藤孝は、「共依存」に嵌るタイプの人間が「対等な人間関係」がかえって不安の種になっていること、「自分の無能を悟られたくない」ために人と距離を置きたがる傾向を「親密さからの逃走」と指摘する。そもそも生まれ育った家庭環境の中で「自己愛」が育っておらず、そうした自己不全感を抱えて生きることを余儀なくされている「私」だからこそ、必要以上に誰かに「心を読まれる」ことに怯え、他人と距離を置きたがるのではないか。<sup>10</sup> ジョン・フリエルとリンダ・フリエルは共著『アダルトチルドレンの心理』の中で、エリクソンの発達理論に基づき、「共依存」の定義の基礎に「アイデンティティの発達阻止」という要素があることを指摘している。私たちは『大人の仮面』をつけて、だれかが「私たちを見つけ出したり」正体を暴いたりするのではないかとお

\* 8

J. Lash, *The Seeker's Handbook*, Harmony, 1990, p.249

\* 9

斎藤孝「魂の家族を求めて」、小学館文庫、一九九八、一九七頁

\* 10

John Bradshaw は *HOMECOMING Reclaiming and Championing Your Inner Child*, BANTAM BOOKS, 1990, p.17 (ジョン・ブラッドショー・新里里春監訳『インナーチャイルド』NHK出版、一九九三、四一頁)の中で、機能不全家族の中で育った子どもたちには、「見捨てられる恐怖と呑み込まれる恐怖」の「二つの両極端をいったりきたり」するという観点から「彼らには『親密性の機能不全 intimacy dysfunctions』が見られると指摘する。「私」は夫に取り残されるという感覚を持つということから「見捨てられることを恐れて」いるように見える。また人に心を読まれることを極端に嫌うということから「呑み込まれることを恐れて」いるように見える。「私」は揺れ動く両極端の恐怖の中で、他人との親密性のとり方に戸惑っているように見える点についても言及しておきたい。

びえている傷ついた子どものようなもの」だという。その中で「自分の外側に対して過剰反応する」のは「共依存の否認」に当たる行為であり、「自分の内側にある」「自分の感情、つらさ、喜び、希望、夢」などをすべて「避けて」通ろうとする面を指摘している。

フリエルらはさらに「共依存と嗜癖 addiction を統合するモデル unifying model」として図1を示

し、表面にあらわれた「嗜癖 addiction」と生まれ育った家庭で学習した「罪悪感」「恥」「見捨てられる恐怖」といった「より深い現実」との間に「介在している」のが、私たちが「共依存」と呼んでいるものだととらえている。症状としてあらわれる依存症などの根本には「共依存」の問題が根付いており、さらにその

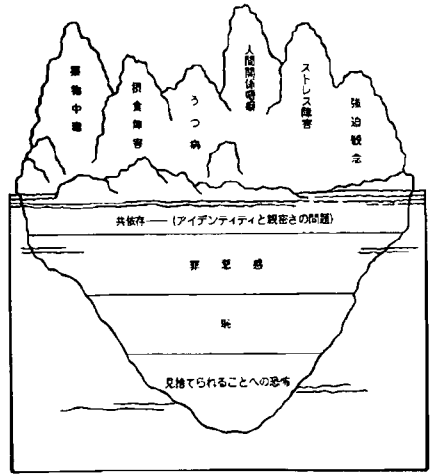


図1 J. Friel & L. Frielによる共依存と嗜癖を統合するモデル

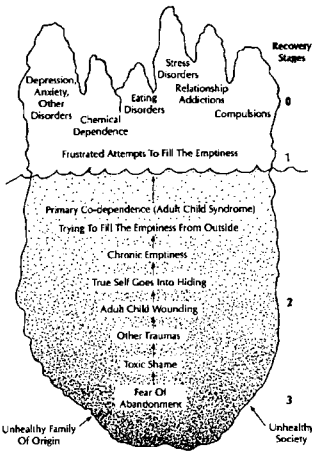


図2 C.L. Whitfieldによる氷山モデル The Iceberg Model

\* 11  
John Friel & Linda Friel *Adult Children: The Secrets of Dysfunctional Families*, Hoi, 1988, p.158 (ジョン・フリエル、リンダ・フリエル『アダルトチルドレンの心理』、ミネルヴァ書房、一九八九、一九一〜一九二頁)

奥には各個人のもっと根深い問題が横たわっているというのである。<sup>\*12</sup>

Whitfieldは同様のモデル(図2)を用いて、この「より深い現実」をさらに細かく考察し、「空虚感emptiness」の概念を用いている。<sup>\*13</sup> この「慢性的空虚感chronic emptiness」は、本稿が先に考察した〈満たされない感じ〉に通じる概念と考えている。自尊心の低さによって、自分が自身の足で立ってここにいるという実感が持てず、何をしても自分は「とり残された」という〈満たされない感じ〉が残ってしまう。そしてそのさらに根本には「有毒な恥toxic shame」の意識と「見捨てられる恐怖fear of abandonment」が貼りついている。<sup>\*14</sup> 幼少期に親からも誰からも「これでよい」というOKサインをもらえずに、失ってしまった自尊心。その根本には自分を丸ごと預けられる存在と出会えなかった、他者に対する「基本的信頼感」の欠如というものがあるのかもしれない。それを示したのがこの下図だとするならば、この問題はあまりに根深い。家庭環境などの成育上の問題については作品の中には描かれておらず、残念ながらこれ以上は踏み込めない。しかし以上考察してきたように「私」の育った家庭環境の分析とともに総体的にとらえていかなければならない課題であることは想像に難くないだろう。

### (三)「私」はなぜ獣を「殺戮」したのか―「私」におけるインナーチャイルドとしての獣

ところで「私」が忌避した獣は、「私」を「深い深いところ」で愛し続けていた存在で、彼女に「プロポーズ」するということを目的として「私」のところに這いあがってきたという。最初に「私」がこの獣の存在を認めたのは「まるで私自身の体の中から聞こえて」きたような「くぐもった音」からであり、その後すぐに「私」にその実在を現

\* 12

Ibid., pp.158-160 (前掲書、一九二―一九三頁)

\* 13

Charles L. Whitfield *Co-dependence: Healing The Human Condition*, Hearth Communications, Inc. 1991, p.66

\* 14

Ibid., pp.67-68

したのは、彼女が小さい頃から友達のように接していた「椎の木」の根元からだだったという。これらのことから考えてもこの獣は、「私」とまったく無関係のところからやってきたものではなく、むしろ「私」と直接結びついている場所から「這い出て」きた存在である。「前からあなたを愛していた」と告白されて「プロポーズ」される相手は、普通ならば当然のことながら自分とはまったく異質の存在、まさしく「他者」であろうが、「私」の場合は自分と結びついたところから「這い出て」きた自分の中の〈他者〉であり、「私」はこの〈他者〉から「告白」され、「プロポーズ」を受けるのである。

他人から愛された実感を持たず、それゆえに自分をも愛することができないために「共存」に関わる病理に苦しんでいる人たちが、自らを育て直し、自己を回復することで病を克服するためのプロセスには、自分の中にある「インナーチャイルド」(無視され、傷ついた「過去の内なる子ども」<sup>\*15</sup>)を癒すことが求められるという。ひたすら親に愛されたいと願う自分、安心してその身をゆだねられる存在との至福の感覚を生き直すことで、少しずつ自己を回復していくという「治療」の道である。最後に「私」が獣と闘う場面を、このインナーチャイルドの癒しという観点からとらえ直してみたい。

「私」の中からまず「音」として聞こえてきて、その後その姿も現し、「私」に対して執拗に関係を迫った「獣」が求めたのは「私」との結婚だったということを考えると、「私」にとってこの獣とは、自分の中の「愛されたい」願望、過去に何らかの理由で傷つけられてしまったままの私すなわち「インナーチャイルド」が顕在化したものだったのではないか。すなわち自分の中の〈他者〉である「インナーチャイルド」が実在化した「自分を認めてほしい。愛してほしい。」と訴えることで「私」に自己回復の道を迫った

\* 15

John Bradshaw, *Homecoming: Reclaiming and Healing Your Inner Child*, Bantam, 1982, p.7  
(ジョン・ブラッドショー「インナーチャイルド―本当のあなたを取り戻す方法 改訂版」、日本放送出版協会、二〇〇一、二七―二八頁)

ということである。

「私」がこの「自分の中の〈他者〉」を認められるようになったとき、「私」は自分の中の傷ついた「インナーチャイルド」を癒し、それによって自己回復の道を歩み、彼女の歪んだ関係性の病を克服することができたのではないか。つまり結果として夫だけにしがみついて生きてきた自分の人生を相対化したうえで、「自己の内的感覚」<sup>16</sup>を取り戻し、自己アイデンティティを回復する。すなわち「私」は自分の意志でやるべきことを見つける意欲が芽生え、さらに必要以上に自分の心を読まれることの恐怖からも抜け出して、対等に人とわたりあえる人間に成長する可能性があったということである。ところが物語上での「私」は、獣の存在を認めるところか、徹底的にいたぶり、考えられるあらゆる方法で苦しめた末に、この獣を殺してしまう。彼女は自分の中の「回復のプログラム」を自ら破壊し、機会そのものを潰してしまったということになる。

最後に獣が見せた「悲しそうな膨れた目」が「名残惜しそうに空中に残った」という描写は、その意味であまりにも悲しい。涙をいっばいにためて、最後に言おうとした「何かすごく大事なこと」もおそらくその目の中にあっただろう。そのようにして浮かぶ「目」を目の当たりにしてもなお「私」は、「そんなことしたって無駄」「お前には何も言えない、お前には何もできない」と思い、強く攻撃をかける。「何も言えない」「何もできない」と獣に通告することは、あらゆる人間性の否定と結びついており、その意味で究極の相手に対する攻撃ともいえる。ためらいもなくそのような残虐さでその「目」を消してしまった「私」の〈心の闇〉は、限りなく昏い。心を開いて自己と向き合うことをただひたすら恐れ、その恐怖から逃れるかのようにさらなる過激な行動に自らを追

\* 16

*Ibid.*, p.9 (前掲書、二九頁)

い立って行く。そしてせっかくの気づきのチャンスもその「過剰反応」によってすべて再び「自分の内側」で自己処理してしまう。自分の問題に気づかないまま、結局同じことを繰り返す。ここにこそ「私」の抱える問題の底なしの深さが垣間見えるだろう。そして「私」のように自分でもそのからくりが気づけないまま、人知れずもがき続けているであろう現実社会の人間について、改めて思う。

あらゆる「依存症」の病に苦しみそこから逃れたいと願うが、結局最後には自らの掘った穴に嵌り込んでいく人々がこの現代社会には数多くいる。そこから救い出したいと手を差し伸べても、彼らが自分の根深い問題に気づき、自分でそのループから抜け出そうと思わない限り、それは至難の業だ。周囲の人はなすすべがない。「私」の深いへ心の闇を、この「共依存」をキーワードにしていたどっていくと、この物語は、そのような現代社会全体が抱える大きな問題に辿りつくものと考えている。

### 三 もうひとつの「物語セラピー」<sup>ナラティブ</sup>

— 青年期にある子どもたちに自己同一性を育てるための文学教材

以上「緑色の獣」を「共依存」という関係性の病理という観点から考察を進めてきた。「共依存」が、アルコール依存症患者の妻に限らず、広く「機能不全」を持つ家族あるいは社会全体から生み出される病理であるとしたうえで、日本におけるその社会文化的背景を分析する緒方明の見解をふまえると、この「私」のような人間は、もはや現代社会全体に潜在している一つの典型的なタイプと言ってよいのではないだろうか。学校で

\*17  
緒方明 「アゲルトチルドレンと共依存」、誠信書房、一九九六



は規律に縛られて「自分らしさ」を抑圧され、家庭でも親の生き方を押しつけられて「よい子」でいっづげなければならぬ子どもたち。この構図は高度成長時代以降、日本社会に取り沙汰されてすでに久しいが、かつての「学校の規則・家庭の期待」に対する「子どもの抵抗・反発」というあり方と現在が大きく異なる点は、土井隆義が指摘したように、一九八〇年代末までにはあったその強制システムと対峙する子どもたちの姿が、今は見られないというところにある。現在はそうした学校や家庭の呪縛に「真っ向から立ち向かおうとする子どもたち」はごく稀で、彼らはたとえそうした「強制システム」に違和感を感じても、直情的に表立った反抗をすることはしない。形の上では親や教師に「素直に」従うのである。しかし当然のことながら、その「違和感」や「反抗意識」は、彼らの中から消えたわけではない。その結果として、人知れずそのわだかまりを自身の〈心の闇〉にため込んでいくのである。

子どもたちは決して学校や親に「従順」になつたわけではないと考えるべきである。表向きは学校の規則をおとなしく守り、親の定めた生き方に則って生きているように見える子どもたちの中には、本当はそのように従いたくはないが仕方なく、規則や親の指図を守っている者もいるということだ。「反抗するのは面倒くさいし、とりあえず従っておくか」という子どもたちは、決して「従順」なのではない。わだかまりを自分自身の心のうちにしまい込んで蓋をしてしまっているだけだ。もちろんそのようにして、表に見せる自分とその内側にしまい込んだ〈心の闇〉とのバランスをうまくとり続けながら上手に人生を渡りあえる子どもたちはいるだろう。むしろそんな「世渡り上手」の方が、今は多い時代なのかもしれない。しかし筆者が気になるのは、その中にあってどこ

\* 18

土井隆義 「キャラ化する／される子どもたち」、岩波ブックレット、二〇〇九・六、一四頁

かでそのような「現実の『光』と〈心の闇〉」とのバランスを崩してしまう子どもたちの存在だ。この「私」のように、年齢としては大人になっても精神的には大人になりきれず、自分の中の大人になりきれない自分を抱えて生きざるを得ない人間は決して少なくないだろう。

この作品を教材として青年期にある子どもたちとともに読むことが、もしかしたら潜在的に「私」のような問題を抱えて生きる人間の心のスイッチをONにするきっかけとなるかもしれない。「共依存」が「機能不全家族」のもとに起こりうる病なのだとしたら、社会全体の数多くの比率を占める家庭がこの「機能不全家族」とも言われる時代である。この問題について取り上げることが、決して特殊なケースの話し合いにはならぬのではないか。また私たちの日頃の言動の裏側には、多かれ少なかれ誰しも「私」のように、人にはめったに見せることのない感情が貼りついているものであり、物語を通して登場人物の「裏側」に気づくということが、そのまま自分自身の「裏側」の存在にも気づかされる重要な機会となりうるかもしれない。さらに、この「私」が獣を自分のやりかたで「殺戮」するに至ったように、自分が良かれと思ってしたことが、逆に自らの成長の機会を自ら閉ざす、足かせになっていることもある。物語をたどり、読み手が「私」の立場に立って「私」の行動をメタ認知的にとらえていくプロセスの中で、子どもたちが自分自身の行動を相対化してとらえる機会を提供するという面も見逃せない。この「メタ認知」能力の育成という点については、稿を改め論じなければならぬ問題であるが、物語の枠組みを通してそのようなあり方を擬似体験する機会が、彼ら自身のメタ認知能力を育てることにつながるのではないかという点も併せて強調しておき

たい。

ナラティブ・セラピーという、臨床心理学の分野ではカウンセリングの一手法としてその地位を確立しつつある治療法がある。物語ることによって自分自身の抱えていた問題に自ら気づき、乗り越える方策を見出すものである。この従来の「ナラティブ・セラピー」とは違うが、筆者が青年期にある子どもたちに文学教材を読むことを通して実現したいこともまた、「物語」<sup>ナラティブ</sup>による「セラピー」と言えるものかもしれない。すなわち「物語」を読むという行為を媒介として、子どもたちがその中に描かれた問題に気づき、それを自らの問題と重ねながら自己同一性を育てるきっかけを見出すという試みである。

教材となる「物語」に描かれているのは、生きた人間とおぼしき者たちが、生きた現実とおぼしき世界の中で泣き笑い、喜び苦しむ経験である。それは読み手自身の人生そのものとは異なるが、その延長上において考えうる問題が散りばめられている。「物語」の中に描かれた人間の経験を通じて、読み手は自分の抱える問題に気づかされたり、あるいは自分が考えもつかないようなアイデアで苦境を切り開く姿を目の当たりにし、自分自身の生きるヒントが得られることもあるかもしれない。

ところで本稿が繰り返し使用してきた「物語」とは、ポール・リクールが『時間と物語』において明らかにしたところの、人間経験をプロットとして筋立て物語化し、語り出された物語という意味を込めている<sup>19</sup>。そこには必ず発信者がいる。彼が自分の語ろうとする経験を自分の語り方で筋立て、それを読み手の前に差し出す。この経験の再構成としての「物語」をたどるという営みは、たとえば単に「いつどこで誰がどんなことをしたお話であるか」を追いかける「ストーリー読み」とはまったく異なる。「物語る」

\* 19

Paul Ricœur *Temps et Récit I*,  
Edition du Seuil, 1983, pp.85-129  
(『時間と物語Ⅰ』新曜社、一九八  
七、九九〜一五六頁)

という行為には語り手の意図がある。どのように語るかによって、同じストーリーでも受ける印象がまったく異なってくるのは、その語り手の思いが反映していることに他ならない。そして「物語る」という行為には語り手の意図しなかった意識下の思いが見え隠れするものである。

野口裕二は、現在さまざまな研究分野で取り沙汰されている「ナラティブ・アプローチ」を考察し、これらの多くが「いまだ語られていない物語」を軸に展開しているという点に着目する。<sup>\*20</sup>たとえば医療現場などで患者がカウンセラーに導かれ、自分のことを語る中で、やがて傷ついた自分を対象化し、苦しみの根本にある問題に気づき、癒されていくというナラティブ・セラピーがある。この時患者は信頼するカウンセラーに励まされ「自分の中で秘密にしてきた誰にも語ったことがない物語」や、語りたかったが「語る機会がな」かった、あるいはこれまで「誰も聞いてくれ」なかった物語を語ることで自己を回復していくという過程はもちろんあるが、もう一つの「自分でも意識しておらず、自分の中でまだ物語として成立していないものを物語化していく」過程も見逃してはならない。「物語る」という行為には、語り手自身も気づかずに語ってしまう「物語」もあるだろう。この語られた言葉の裏側に貼りついている「隠された思い」を読み取ることは、語り手自身が自分の抱えてきた問題に気づく大きなきっかけとなる「物語」であり、カウンセラーにとってもまた、語られなければ気づかなかった患者の苦しみに近づける重要な契機となるものである。

「物語」をそのようにして「語り手の物語り」として読むという行為は、だからこそ語られた内容の表面には見えてこない問題を引き出しうる重要な契機となり、結

\*20  
野口裕二「ナラティブ・アプローチの展望」、『ナラティブ・アプローチ』、勁草書房、二〇〇九、二六五頁

果として物語世界を重層的にとらえるまっかけとなる。そしてこの「物語」を読むことで、読み手の自己同一性の問題にも導いていくという目的は、彼らがこの「重層的な物語」に気づいた時にこそ生かされるものである。彼らの中にもこの「重層的な物語」があることに気づくこと。自分の中にもまだ知り得ない自分の「物語」があるかもしれないということに気づくこと。何らかの機能不全を持った家庭に育ち、大人になりきれない自分を抱えながらそれに気づかずにいる子どもたちがいる。あるいは過去の経験で負った傷により受けた辛い気持ち、知らずに抑圧しながら生きている子どもたちもいる。もしもそのような「自分の内側」に葬った気持ちがあるならば、彼らの自己同一性を確立し彼らが無事に青年期を脱する足かせとなっているのであれば、まずはそのことに自ら気づき、それを乗り越える後押しをする必要があるのではないか。そして「物語」による擬似的な体験は、その重要な役割を担うものなのではないだろうか。

本稿の出発点となったのは、現在の勤務校で大学生とともにこの「緑色の獣」を読み合った経験である。この段階で筆者はまだ、この「私」が抱える〈心の闇〉の闇の深さには気づけておらず、授業の中での話し合いは充分であったとは言えない。本稿での考察をふまえ、次年度の演習で再度取り上げるつもりである。再読を通して見えてくる問題もあるだろう。学生たち自身が一年を経て自分自身の物語との接し方に変化を起こしていることに気づく機会でもあると考えている。彼らが「私」の病理と、そしてもしかしたら彼ら自身の延長上としてもとらえられるかもしれないこの問題と、授業を通してもう一度じっくり向き合ったうえで、この「物語セラピー」の実践報告については、改

\* 21  
基礎ゼミナール（大学二年生対象）  
および応用ゼミナール（大学三年生対象）の演習でそれぞれ実施した。

めて機会を作り報告したいと考えている。